

(続紙 1)

京都大学	博士（ 教育学 ）	氏名	小宮あすか
論文題目	Socio-cultural grounding of regret and its functions: Comparing regret in Japan and the United States		
(論文内容の要旨)			
本論文は、後悔とその機能の社会文化的基盤に関して、実験法と質問紙法を用いて実証的に解明したものである。 6章、5個の実験から構成された英語論文である。 Chapter 1 “Introduction” の1.1および1.2では、先行研究のレビューを経済学と心理学、適応論の観点から行い、今までの後悔研究における後悔とその機能に関連する概念を整理している。 1.3は、今までの後悔研究では、社会への適応促進の点について検討してこなかった点を指摘し、「社会的適応」および「自己損失状況-他者損失状況」という二つのキーワードをもとに、社会文化的要因を考慮した際に生じる問題点について論じている。 1.4では本論文の目的、研究課題を呈示し、それらに関わる理論的背景である文化心理学のagency理論、感情の社会的機能、および住居流動性理論と本論文の構成について述べている。 Chapter 2 “Cultural differences in regret: Regret in self and interpersonal contexts” においては、後悔経験に関わる責任感が文化によって異なるため、後悔生起の状況が異なる可能性を指摘している。そして、研究1では、日米の参加者に、人生を振り返って、個人状況および対人状況でもっとも強く後悔している出来事を挙げてもらい、対人状況では日本人のほうがアメリカ人よりも強い後悔を感じていたのに対し、個人状況では文化的な差異は見られなかったとしている。 Chapter 3 “Regret and its behavioral linkage: A US-Japan comparison” では、後悔経験の文化的差異がいかに行動変容機能に影響するのかを検討している。そして、研究2では、日米でルーレット課題を用いた実験を実施し、自己損失状況と同様に、他者損失状況においても、後悔回避のための行動調整は共通し、日本人は他者損失状況、アメリカ人は自己損失状況でその傾向が大きいとしている。 Chapter 4 “A function of expressing regret” において、研究3では、他者損失状況での後悔の表明が、信頼性を伝達する機能があるかどうかを仮想場面法で検討している。その結果、その効果を見いだした。研究4では、信頼ゲームを用いて、取引相手が後悔を表明している場合には、表明していない場合よりも提供額が大きくなり、信頼されていることが示されたとしている。 Chapter 5 “Cultural differences in the effects of apology on friendships: Re-examination of functions of regret” では、謝罪が友人関係に与える影響の文化差に基づいて、後悔の機能を再検討している。研究5では、日米の参加者に仮想場面法で謝罪と補償の効果を検討した結果、日本人は、謝罪を補償よりも重視するのに対し、アメリカ人は差がないとしている。そして日本人は謝罪が関係修復の機能を果たし、関係維持に寄与するという解釈として住居流動性理論を導入し、議論をしている。			

(続紙 2)

Chapter 6 “General Discussion” においては、6.1で後悔の機能は社会文化的基盤を持ち、社会への適応を促進すると論じ、6.2では本研究の意義として、(a)後悔の社会文化的基盤の観点の導入、(b)後悔の社会的機能についての解明、(c)後悔のミクロ-マクロプロセスの提起であることを述べ、さらに6.3では本研究の限界および今後の課題として、住居流動性に関する実証データや進化的モデルの必要性について述べている。

注) 論文内容の要旨と論文審査の結果の要旨は1頁を38字×36行で作成し、合わせて、3,000字を標準とすること。

論文内容の要旨を英語で記入するときは、400～1,100 wordsで作成し審査結の要旨は日本語500～2,000字程度で作成すること。

(論文審査の結果の要旨)

本論文は、後悔とその機能の社会文化的基盤に関して、日米の参加者を用いた比較文化アプローチによって実証的に解明したものである。日常生活における後悔を明らかにする質問紙法と統制された実験法を用いた5つの研究を行い、さらに、後悔の社会文化的基盤についてのモデルを提案している。

その論文の特色は以下の3点である。

- (1) 高次の認知的感情である後悔の社会文化的基盤を実証的に解明した点
- (2) 日米両国において、質問紙と実験法を用いて、個人的-対人的文脈における後悔を多面的に明らかにしている点
- (3) 後悔の経験、機能、適応過程に関する日米の文化差に関する新たな知見を英語論文としてまとめ、その一部は、海外の学術誌に掲載される高い水準であった点

Chapter 1「序論」では、本論文の目的として、文化比較アプローチを用いて後悔の社会的機能を明らかにすることを示している。とくに後悔の行動調整機能による社会的適応過程に着目し、道具的適応の概念に基づいて個人的な自己損失状況と対人的な他者損失状況に分けて文脈を捉えている点に、本論文の優れた発想が見てとれる。

Chapter 2「後悔の文化的差異：個人的と対人的文脈」では、日米で質問紙調査をおこない、短期的・長期的後悔の内容を質的に分類し、後悔の強さの差異を量的に明らかにしている。さらに後悔を経験する状況の文化的差異をagencyのモデルに基づいて説明している点が重要な成果である。

Chapter 3「後悔と行動とのリンク：日米比較」では、ルーレット実験によって後悔を引き起こし、行動変容に及ぼす影響を日米で検討している。そして、行動した後悔が行動しなかった後悔よりも大きく、後悔回避の選択をおこなうという文化普遍的な行動調整と、こうした傾向が日本人は他者損失状況で、アメリカ人は自己損失状況で大きいという文化差を見いだした点は新たな発見である。

Chapter 4「後悔表明の機能」においては、これまで研究がなかった他者損失状況での後悔の表明を取り上げ、仮想場面法による質問紙や信頼ゲーム実験によって、後悔表明による信頼性の伝達による友人関係の修復・構築を促進する効果を見いだした点は、独創的な研究成果と評価できる。

Chapter 5「謝罪が友人関係に及ぼす影響の文化差；後悔の機能の再検討」では、日米の参加者に仮想場面法に基づく質問紙によって検討した結果、他者損失状況において、日本人はアメリカ人に比べて、謝罪を補償よりも重視し、謝罪が関係修復の機能を果たすことを見いだしている。そして、日本人は文化的適応課題である関係維持のために、他者損失状況において後悔に基づいて行動調整を行い、他者に後悔を表明することによって信頼性を保持しているとして、本研究の結果全体の再検討を行っている。これは、対人場面における後悔による文化的適応過程をとらえている点で、従来の後悔研究を文化心理学、社会心理学の領域に拡張する重要な展開である。

Chapter 6「総合考察」においては、本論文の日米における5つの研究結果に基づいて後悔の機能が社会文化的基盤を持ち、社会への適応を促進する過程の統合的フ

(続紙 4)

レームワークとして示している点で、後悔研究における理論面での貴重な貢献である。さらに、今後の課題として、住居流動性やagencyに関わる実証データの必要性や進化ゲーム理論に基づく精緻なモデルの必要性など今後の重要な課題を明確化している点は、評価できる。

以上のように本論文は、後悔の社会文化的基盤に関して、オリジナルな着想に基づき、日米において質問紙法と実験法によって後悔の内容、機能、適応過程の文化差に関する多くの重要な発見と理論的成果をあげているが、今後に残された問題として以下の点が指摘できる。

- (a) 他者後悔状況と関わる住居流動性に関しては、測定が必要であり、また、この理論だけで、本論文全体の結果を説明するには限界があること
- (b) 後悔の発生因、対象、消失過程、謝罪との差異などさらなる検討が必要なこと
- (c) 後悔の認知-学習メカニズムとその普遍性、意識-無意識的過程、メンタルヘルスとの関連、発達的变化などの発展的考察が可能であること

しかし、こうした点は、本論文で見出された多くの新しい知見の価値をいささかも損なうものではない。

よって本論文は博士（教育学）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成23年2月4日、論文内容とそれに関連した試問を行った結果、合格と認めた。

論文内容の要旨及び審査の結果の要旨は、本学学術情報リポジトリに掲載し、公表とする。特許申請、雑誌掲載等の関係により、学位授与後即日公表することに支障がある場合は、以下に公表可能とする日付を記入すること。

要旨公開可能日： 年 月 日以降